# Ⅰ．南京大学への教員派遣事業

## １、派遣教員

| | | |
|---|---|---|
| 派遣教員 | 武藤康弘 | 奈良女子大学文学部文化メデイア学コース　教授 |

## ２、派遣期間

平成 23 年 10 月 31 日（日）から平成 23 年 11 月 6 日（土）　７日間
10 月 31 日（日）　関空　上海浦東空港経由　南京禄口空港
11 月　1 日（月）　南京大学にて、教室の設備等を確認し、配布資料等印刷
11 月　2 日（火）～4 日（木）　講義
11 月　5 日（金）～6 日（土）　侵華日軍南京大屠殺遭難同胞紀念館
総統府　夫子廟　中山門　南京城壁　等見学

## ３、事業概要

### ３－１　講義日程

| 授業日 | 講義時間 | 講義題目 |
|---|---|---|
| 11 月 2 日（火） | 08:00～09:00 | ・古都奈良の宗教世界 |
| | 09:00～10:00 | ・世界遺産古都奈良文化財 |
| | 10:00～11:00 | ・東大寺二月堂修二会お水取り |
| | 11:00～12:00 | ・修正会・修二会 |
| | 13:30～14:30 | ・年初の除災儀礼 |
| | 14:30～15:30 | ・御田植祭と農耕儀礼 |
| | 15:30～16:30 | ・疫神祭と祇園祭 |
| 11 月 3 日（水） | 08:00～09:00 | ・日本における道教信仰 |
| | 09:00～10:00 | ・収穫祭としての秋祭り |
| | 10:00～11:00 | ・中世祭礼の芸能 |
| | 11:00～12:00 | ・田楽と猿楽 |
| | 13:30～14:30 | ・春日若宮おん祭 |
| | 14:30～15:30 | ・東アジアの陶磁器交易 |
| | 15:30～16:30 | ・明清の磁器と伊万里 |

| | | |
|---|---|---|
| 11 月 4 日（木） | 08:00～09:00<br>09:00～10:00<br>10:00～11:00<br>11:00～12:00<br>13:30～14:30<br>14:30～15:30 | ・日本の磁器の発展と欧州への影響<br>・ヨーロッパとアジアの陶磁器交易<br>・ヨーロッパ陶磁における東洋的意匠<br>・ウルトラマンと日本の特撮ヒーロー<br>・セーラームーン現象<br>・日本のアニメとオタク文化 |

３－２　講義概要

テーマ　日本文化の雑種性

雑種文化論、すなわち加藤周一氏が提唱して久しいこの日本文化論を、50 年後の 21 世紀の現代において、伝統的祭礼、陶磁器のデザイン、アニメという３つの切り口から、再考してみたのが、本講義の中心的なテーマである。

11 月 2 日

古都奈良の宗教世界では、中国の学生にはなじみない日本固有の宗教である神道について解説を行った。また、世界遺産である古都奈良の文化財に関するビデオを上映しながら、なぜ千年以上前の建築物が保存されているのか、その裏にはどのような先人の苦労があったのかを解説した。また、このような有形の文化財だけではなく、奈良では春日大社の舞楽や中世の能楽や題目立に代表される神事芸能のような無形の文化財も数多く伝承されていることも紹介した。そして、南都楽所の練習に参集し、楽器や舞の練習をする子供たちの映像も提示して、無形の文化財を市井の人々が世代を重ねて伝えていくことの大切さを教示した。

次の東大寺お水取りの話では、はじめに仏教と神道の違いについて解説してから、修正会修二会等の仏教の年初の除災法会の概要について解説した。このなかで、日本では日本固有の信仰である神道のもとに仏教が大陸から伝播して、それ以降神と仏を相互に尊重しながら同時に信仰する神仏習合の様相が 1300 年ほど前から続いてきたことを説明した。このような、異種の信仰が共存するという他の文化にはあまりみられない様相が、日本の信仰の特質であることを明らかにした。そして、このような信仰の重畳性には、中国から伝来した道教系の信仰も含まれていることを、「急々如律令」と記された平城京跡から発掘された呪符木簡を事例として解説した。

次の御田植祭の話では、日本の伝統的な農具には、「唐犂」「唐箕」等の「唐」と名のつくものが多いことを示し、中国雲南省や福建省の農村の伝統的な農具との類似性を明らかにして、日本の稲作文化が中国から伝来したものであることを説明した。さらに、奈良をはじめとする日本各地の御田植祭のビデオを上映して、農耕儀礼と祭礼

の様相について解説した。特に、農耕儀礼のなかで、田遊びと呼ばれる年初に農業の真似事を行って、その年の豊作を予め祝う行事が奈良に集中して分布していることを明らかにした。この田遊びの起源を歴史遡及的に検討すると、春日大社の社家文書に記された平安時代後期の田殖之儀が原型になっているものと考えられる。これは、正月に巫女が行う予祝的な意味をもつ行事であったようである。正月に模擬的な農作業を行う儀礼は、奈良時代後期から行われており、正倉院にも模造農具として「子日手辛鋤」が伝わる。おそらく、平安時代後期の田殖之儀は、奈良時代の宮中儀礼に起源をもつものと推察される。奈良時代の正月に農作業を行う宮中儀礼そのものは、孝謙天皇の時代に、藤原仲麻呂の進言で唐の「籍田」が導入されたもので、これこそ、中国の古代の儀礼が、以後の重要な祭礼の原型となった事例といえるのである。

11 月 3 日

最初の授業では、京都の祇園祭のビデオを上映した。そして、疫神祭と御霊信仰の説明を行い、さらに奈良時代にまでさかのぼる「蘇民将来」信仰と延喜式にも記されている祓の作法について説明した。「蘇民将来」信仰については、蘇民祭等の各地の正月行事で行われる除災儀礼の他、「蘇民将来子孫家也」と記された木簡が、平安時代初め頃の遺跡からも出土していること、現在の祇園祭の粽にも同様の札がつけられていること等を説明した。また、三重県鳥羽市の松下社の正月の注連縄には、木札が付けられていて、表側には「蘇民将来子孫家門」裏側には「急々如律令」の文字と修験道系の九字の護身法の印と陰陽道の五芒星の印がある写真を示して、除災信仰の複合性について説明した。さらに、奈良町の映像を上映して、民家の屋根の上の瓦鍾馗について説明をして、鍾馗像に「急々如律令」の文字と九字の護身法の印が付いている事例や、赤鍾馗を描いた掛け軸等が「疱瘡よけ」として信仰されていた事例をあげ、日本の民間信仰における除災儀礼には、神道、仏教の他に、道教や修験道、陰陽道などが複合していることを解説した。

後半の授業では、秋祭りについて解説した。特に、初穂の奉納等が新嘗祭等の影響をうけていることを、春日大社の祭礼の映像などをもとに解説した。

また、奈良の秋祭りの村々で能楽や田楽等の神事芸能が奉納されるビデオを上映して、神々を慰撫するための神饌、神楽、神事芸能の三者が神社祭祀において重要な役割を果たしていることを解説した。そして、このような地域の神社祭祀の原型ともなっているのが、春日若宮おん祭であることを記録映像をもとに説明した。そして、舞楽や田楽踊等の古典的な芸能が、千年以上前に唐や渤海、新羅、林邑等の東アジアの諸国から伝わり、それが長きにわたり現在まで伝承されたことを解説した。唐の時代の国際色豊かな舞踊等の無形文化財が寺院建築や正倉院御物等の有形文化財とともに伝承されていることに、学生たちは驚きを禁じえないようであった。

２日目の最後の授業では、陶磁器のデザインの東西交流に関するテーマをとりあげ

た。陶器および磁器の起源地はもちろん中国であるが、17 世紀から 18 世紀のヨーロッパの城郭には、調度品として大量の日本製の磁器が中国製の磁器とともに保存されている。ドイツのドレスデンのツヴィンガー宮殿やベルリンのシャロッテンブルグ宮殿の内部の映像を示しながら、日本製の磁器がなぜ当時のヨーロッパで中国製の磁器をしのぐ人気があったのかを解説した。そして、当時アジアとヨーロッパの貿易を独占していた総合商社でもあるオランダ東インド会社は、アジア各地とアフリカに拠点をもち、一時は、台湾の一部も占領した。日本における拠点のひとつである長崎市出島と本拠地であるオランダのアムステルダム市の発掘資料をもとに、当時の生活様式や世界各地からもたらされた陶磁器等について解説を行った。

11 月 4 日

３日目の前半は前日に引き続いて、アジアとヨーロッパの陶磁器交易に関する授業を行った。日本の磁器生産は、文禄慶長の役で朝鮮半島の磁器生産技術が陶工とともに日本に移入されたことによる。その後、初期伊万里様式や古九谷様式を経て、磁器生産の技術は発達し、17 世紀後期にはその頂点ともいえる柿右衛門様式に到達する。ちょうど、その時期に中国は明から清への王朝交代となり、政治混乱のなかで、外国貿易や陶磁器生産が衰退する。当時アジアとヨーロッパの貿易を独占していたオランダ東インド会社は、中国に代わる磁器生産国として日本に注目し、大量の日本製の磁器がヨーロッパに輸出されることになる。日本製の色絵磁器がヨーロッパで高く評価され、各国の王侯貴族の城館で保存されることになり、さらには、マイセン等のヨーロッパにおける磁器生産の契機となったのである。この間の、ヨーロッパと日本における陶磁器の様式変遷とテーブルセッテングの歴史について、豊富な画像資料をもとに解説した。また、中国や日本の陶磁器のデザインの相互の関係性、特にオリジナルデザインとコピーの関係について画像を提示しながら説明した。さらに、柿右衛門様式のデザインは初期のマイセンでコピーされるようになるが、東洋的なデザインがどのような形でヨーロッパの陶磁器のデザインに導入されていくのか、その逆に、ヨーロッパ的なデザインがどのように中国や日本の磁器に移入されるのか、その過程についても解説した。最終的に、中国と日本とヨーロッパの陶磁器のデザインの相互の交流について、画像資料をもとにして明らかにした。

３日目の後半は、日本のアニメに関するテーマで授業を行った。最初の授業では、特撮物の代表としてゴジラを取り上げ、その原作から新作までを順に解説した。そして、第五福竜丸事件などのゴジラの原作に影響を与えた社会的事件についても説明した。最後に、ゴジラの海外版を紹介するとともに、北朝鮮でゴジラをコピーする形で製作された怪獣映画の「プルガサリ」などの二次的な作品についても紹介した。

次に、日本を代表する特撮ヒーロー映画として、ウルトラマンを取り上げた。ウルトラマンの各シリーズと近年のリバイバルシリーズも加えて解説を行った。ウルトラ

マンシリーズの中から、ウルトラセブンをとりあげ、メトロン星人とウルトラセブンがちゃぶ台をはさんで対峙するシーンで有名な「狙われた街」を上映した。1960 年代の東京の姿は、現在の中国の大学生の目から見ても興味深いようであった。当時の中国は文化大革命の真っ最中であり、自国の姿を重ねあわせていたのかもしれない。

このウルトラセブンが作られた当時はベトナム戦争が激しさを増していた頃で、ウルトラセブンシリーズに登場する異星人といったものが、目に見えない戦争の暗い影を表している等の説明を、原作者のひとりで沖縄出身の金城哲夫の話をまじえながら行った。ウルトラマンの話に続いて、石ノ森章太郎とその時代の解説に移り、「サイボーグ００９」、「仮面ライダー」や「ゴレンジャー」をはじめとする現在まで続く戦隊ヒーローシリーズについて解説を行った。

日本アニメの授業の後半は、セーラームーンを取り上げ、コミック漫画から 1990 年代前半のテレビアニメシリーズ、2000 年代になってからの実写シリーズ等について内容を解説した。セーラームーンは、アニメにとどまらず、アニメに登場する特定の場所を仲間で訪問する「聖地巡礼」、アニメの衣装を身に着け、登場人物になりきってしまう「コスプレ」、登場人物のミニチュア人形を収集する「フィギュア」等、現在オタク文化といわれる数多くの現象を発信させた重要なアニメシリーズであることを学生達に説明した。そして、セーラームーンＲシリーズの前半の最終話である「すれちがう愛の心！怒りの魔界樹」と「めざめる真実の愛！魔界樹の秘密」を上映した。セーラームーンは中国でも人気のある日本のアニメで、テレビで放送されたほかインターネットの動画サイトでも閲覧することが可能である。学生達はオリジナル版を日本語で見ることができ、ストーリーの巧みさと登場人物の人物描写の見事さに感激していた。また、登場人物の一人である「ヤーマンダッカ」がチベット仏教の大威徳金剛に由来する名前であることなどの解説を加えた。

最後に、コミックマーケットの映像や、大阪日本橋の様子、最近中国でも増加しているアニメキャラクターを描いた「痛車」の画像などを提示して授業をしめくくった。